

高木家文書の高度活用における関連文書調査の意義

The importance of investigating related documents in the advanced use of documents related to the house of Takagi

名古屋大学附属図書館研究開発室
Nagoya University Library Studies

斎藤 夏来
SAITO, Natsuki

Abstract

Since 2001, Nagoya University Library Studies, which has taken over the task of organizing historical documents handed down from the house of Takagi, retainer to the Shogun, has invested its efforts into investigating documents originating in the Kiso Three Rivers (Kisosansen) estuary region, to achieve not only an inventory of those documents, but advanced applications as well. As a result, in addition to documents that have been scattered and lost from the house of Takagi since the modern era, we have clarified the existence of documents that have been divided between the house of Takagi and regional society from the stage of current use of those documents in the modern world. For example, documents from the house of Hibi, which are examined in this paper, reexamine the Takagi house's role in flood control and monitoring, from the perspective of a regional resident. Documents from the house of Koderu reexamine historical documents originating from the house of Takagi, which was the head of the household, from the perspective of a retainer. The Koderu house also stored documents that had been disposed of by the house of Takagi. Related documents thus offer many contents that help to trace the way in which documents from the head household were managed. By clarifying the way in which documents from the house of Takagi were divided between that household and the regional community, we have achieved an overview of these documents for the first time.

Keywords: historical documents handed down from the house of Takagi (高木家文書), the Kiso Three Rivers estuary region (木曾三川流域), documents from the house of Hibi and Koderu (日比家文書と小寺家文書)

1、高木家文書の整理事業と高度活用への模索

名古屋大学附属図書館が所蔵する高木家文書は、木曾三川の治水史料として、また、江戸時代

の旗本伝来史料として、戦前から注目を集めており、戦後、地域の期待と支持をうけた名古屋大学が、1949年と1957年の2度にわたり、一括購入

できた膨大かつ貴重な古文書群である¹⁾。その総点数は、当初5万点余と見積もられ、1971年度から82年度にかけて設置された高木家文書調査室および高木家文書目録刊行調査室は、全学的事業として5万2千点余の文書を整理し、『高木家文書調査報告書』Ⅰ～Ⅶと、『高木家文書目録』1～5巻の刊行という成果をあげた。

しかしながら、実際に整理してみると、文書の点数は予想以上に膨大で、2万5千点余と見積もられた史料が未整理に終わった。この未整理分に取り組むべく、1989年度下四半期より、教育研究学内特別経費の措置をうけて整理事業が再開され、1991年度からは、総合研究資料館の活動として、整理事業が継続された²⁾。この間、1991年から2000年にかけて、「高木家文書調査報告(補遺1～10)」が、『古川総合研究資料館報告』7～15、および、『博物館報告』16に掲載されている。こうして整理事業が着実に進められるに従い、文書の総点数はさらに予想を上回る規模であることが判明し、2001年4月に設置された附属図書館研究開発室が、整理事業を引き継いだ段階で、文書総点数は10万点と見積もられ、今日にいたるまで整理事業を継続している。

ところで、高木家文書の整理事業をひきついで附属図書館は、文書を単に整理するだけでなく、文書の高度活用を重要な目標の一つと定め、研究開発室発足直前の2001年3月に、平成12(2000)年度展示会「川とともに生きてきた——高木家文書にみる木曾三川流域の歴史・環境・技術——」を開催し、整理文書を電子化して公開する方針を示した。ついで、2003年春季特別展「川とともに生きてきたⅡ——新発見史料・北高木家文書にみる木曾三川流域の歴史・環境・技術——」(2003年3月)、2004年秋季特別展「川とともに生きてきたⅢ——東高木家文書にみる木曾三川流域の歴史・環境・技術——」(2004年10月)をそれぞれ開催し、「高木家文書デジタルライブラリー」の試験公開を行った。そして、2005年4月開催の2005年春季特別展「地域環境史を考える——所蔵資料とエコ(環境共生)コレクション・データベースでみる自然・災害・社会——」にあわせて、高木家文書のほか、伊藤圭介文庫など図書館所蔵資料や、環境科学の情報を統合した「エココレクションデータベース」を構築し、インターネット

上での公開を開始した³⁾。もちろん、この時点をもってデータベースは完成したわけではなく、現在にいたるまで、メタ・データや画像の追加搭載、およびデータの誤脱等の不断の改修に努めている⁴⁾。

この間、附属図書館研究開発室は、木曾三川流域や濃尾地域の自治体や、個人レベルの史料所蔵者との信頼関係構築に努め、貴重な歴史情報資源の教示を受け、その調査・研究を継続している。その中に、日比家文書や小寺家文書など、高木家文書と極めて密接に関わる一大古文書群も存在し、前者については附属図書館への寄贈、後者については大垣市を経由した寄託を受け、それぞれ、2006年秋季特別展「江戸時代の村と地域——美濃養老・日比家文書にみる暮らしと災害——」、2009年春季特別展「旗本高木家主従の近世と近代——高木家文書と小寺家文書——」を開催し、その内容を一般に広く展示、公開した⁵⁾。もちろん、上記の機会に展示できた史料は、膨大な史料群のごく一部にとどまっており、文書群の全体像を示す内容分類目録を作成し公表することが急務となっている。その際、こうした史料群は、具体的にどのように高木家文書と「密接に関わる」のか、分かりやすく提示する必要がある。当面、日比家文書や小寺家文書など、木曾三川流域ないし濃尾地域の歴史情報資源を、どのようにして、上記の「エココレクションデータベース」に搭載し、長期的視野に立って充実させてゆくのが課題となっている。今年度(2009年度)は、その手始めとして、「エココレクションデータベース」内に「流域伝来の歴史情報資源」というチャンネルの新設し、その中に日比家文書を搭載する予定だが、日比家文書や小寺家文書などの歴史情報資源と高木家文書の連動を、目録上およびデータベース上でどのように連動させて表示するのか、現時点での見解をまとめ、今後の作業に備えるとともに、こうした高木家関連文書調査の意義について再確認を行いたい。

2、日比家文書について

日比家文書(日比達男氏より名古屋大学附属図書館へ寄贈)は、美濃国石津郡沢田村(現岐阜県養老郡養老町沢田)の庄屋や、旧養老村の村長などをつとめた豪農方に伝来した5887点(2010年

3月17日段階集計)にのぼる古文書群である。日比家に伝わる系図・先祖書などによると、同家は、天正2年(1574)死去の八左衛門を初代とし、現当主達男氏を16代とする。文書群において、もっとも古い年次の史料は、寛永8年(1631)11月1日付の「多芸郡沢田村未之年免定之事」で、写しではなく原本である。もっとも新しい年次の史料は、昭和25年(1950)7月日付の「沢田区有山林譲受ニ関する規約」である。後述のとおり、他所から流入したとみられる文書群の存在も考慮しなければならないが、単純にみれば、320年にわたり蓄積されてきた古文書群ということになる。

文書の分類は、今後流動する可能性もあるが、内容に基づき、表1のように設定している。大分類はⅠ～Ⅷの8項目からなるが、ⅧはⅠ～Ⅵに分類できなかった絵図類、Ⅷは分類困難な断簡等であり、実質的な大分類は6項目である。このうち、Ⅱ1-2～3、Ⅱ6、Ⅴなど、もとは他家や他所に伝来したとみられる文書群をまとめた形で含み込んでいる点を一つの特徴とする。なお、内容分類を施す以前の、文書調査着手時点の伝来状況(現状記録)については、文書箱など既存のまとまりごとに整理番号を与えることで対応している。分類番号と整理番号の双方を組み合わせた活用が望まれる。

文書の構成は、一見して典型的な近世村方文書といえるが、最大の特徴の一つは、「Ⅰ近世村方-5普請-4江濃運河」に分類した65点の文書である。幕末期に井伊直弼を失い、幕政における地位を低下させていた彦根藩は、外国船による大坂湾の封鎖と上方の物資供給途絶という事態を想定し、伊勢湾から琵琶湖まで運河を掘削し、物資供給路を確保しようという、自己の存在感を示そうとするかのような壮大な構想を立てている⁶⁾。上記の一群の史料は、その運河掘削が予定されていた現地に在住する日比家に残されていた貴重な史料である。木曾三川流域および濃尾地域伝来の史料を丹念に調査研究してゆくことで、幕末期の全国的な政局と地域社会との関わりを示す希有の史料が発見されたのであり、今後も、同様の発見はあり得るといえよう。

もう一点、日比家文書で特徴となるのは、本稿の課題である高木家文書との連動である。いうま

でもなく、高木家文書は旗本であった武家伝来の古文書群であり、日比家文書は村方の庄屋伝来の古文書群であり、その内容構成は根本的に異なる。機械的な内容分類ではなく、各文書の個性や特色に基づいた内容分類を試みるならば、ふたつの古文書群は、相互に重なり合う部分がほとんどないかに見える。しかしながら、日比家の居住する沢田村は、高木家による治水見回り等の管轄域であったことを想起するならば、当然、その方面での接点があったものと予測できる。こうした予測に基づき析出分類したのが、

①「Ⅰ近世村方-5普請」のうち「1川通り」の史料191点

② 同じく、「2配符」の史料26点、

③「Ⅰ近世村方-6争論-1水論」の史料50点以上、合計で267点である。

このうち、たとえば①に含まれる「覚(猿尾出籠間尺届写)」(宝永7年〈1710〉2月、乙坂村庄屋・彦内印、年寄・助左衛門印→辻六郎左衛門様、高木五郎左衛門様、高木求馬様、高木富次郎様、分類番号Ⅰ5-1-1、整理番号2-5-1)は、高木家文書に含まれる「石津郡沢田村川通猿尾出籠改帳」(五兵衛他→辻六郎左衛門他、宝永7年2月、E3-1-380)の関連史料である。また、高木家文書に含まれる〔乙坂村願い場所牧田川通り沢田村出籠取払いにつき書状下書〕(加藤要左衛門他→棚橋辰左衛門他、〔宝暦12年〈1762〉〕7月22日、E3-1-2433し)は、「E治水-3普請見廻-1普請見廻」のうちに分類されているが、日比家文書を見ると、③のうちに、「乍恐奉願上口上之覚(沢田村多良川通新規川除のため乙坂村へ水先押懸け難儀至極につき新規普請所取払のこと)」(戸田采女正領分・石津郡乙坂村名主・彦太夫他→多良御役所、宝暦12年6月、分類番号Ⅰ6-1-34、整理番号6-2-2)、「石津郡乙坂村・沢田村川通出入返答書」(千種清右衛門御代官所・石津郡沢田村庄屋・忠兵衛⑩他→多良・笠松御役所、宝暦12年6月、分類番号Ⅰ6-1-35、整理番号7-5)など、水論当事者から多良(高木家)、笠松(幕府代官)役所に提出された関連書類が存在し、むしろ「E治水-2用水論所見分-1用水論所見分」に分類すべき文書ではないかと考えられる。高木家が具体的に関わった治水役儀について、日比家文書は、流域住民により密着した視角を持っていることを示す

表1、日比家文書内容分類案

大項目		小項目	備 考
Ⅰ 近世村方	1 支配		村役、村掟
	2 貢租	1 免定	
		2 皆済	
		3 城米・廻米	
		4 助郷・人足	人足馬、宿継、継立、伝馬、運送、琉球人
		5 土地	
		6 絵図	
		7 その他（諸上納・願届）	年貢、定免、起返、荒地、冥加金、人船賃
	3 財政	1 帳簿	夫食
		2 入札	
		3 金銭管理	
		4 土地管理	鳥撃
	4 戸口	1 送状	
		2 宗門・往来手形	
		3 家数人別増減帳	
		4 報奨救恤	
	5 普請	1 川通り	高木家文書 E3-1 関連
		2 配賦	高木家文書 E3-1 関連
		3 用水管理	
		4 江濃運河	新川開拓
		5 その他	
	6 争論	1 水論	高木家文書 E2-1 関連
		2 山論	
		3 長江家関係	
		4 小左衛門一件	
		5 その他	
	7 郡中・組合村		跡役 会所、小役、惣代、郡中割 屋敷含む
Ⅱ 近世経営	1 土地取引	1 日比家	
		2 八左衛門家	
		3 他家	
		4 不明	
	2 金銭取引		
	3 家計	1 帳簿	掟米
2 金銭物品等書付			
3 融通・講			
4 家屋敷地			
5 文化・交際		日記	
6 伊藤佐太夫家			
Ⅲ 近代行政	1 政府	1 布令布告類	
		2 軍事・戦争	
		3 国勢調査	
		4 地券管理	
	2 公文書一件		
	3 財政	1 帳簿	
		2 徴税	標目、掟米
		3 予算	決算
		4 会議・議案・協議	選挙
		5 金銭物品管理	民費、村費、国債、度量衡
		6 土地管理	地租改正、地籍図
		7 産業振興	
		8 消防水防・駐在・害獣駆除	火器銃器
		9 教育衛生	育児院、害虫駆除
		10 共有地入札	
		11 寺社管理	
	4 戸籍	1 自治・選挙	辞令
		2 送受籍	
		3 調査・届	寄留
		4 兵役	
	5 工事	1 用水	
		2 砂防	
		3 堤防道路等	
		4 その他	
	6 裁判	1 用水	
		2 その他	
	7 その他		
Ⅳ 近代経営	1 土地取引		掟米
	2 養蚕		
	3 家計	1 帳簿	
		2 金銭物品書付	掟米
		3 借地受作証券	
4 家族		学校	
5 文化・交際		大麻・初穂、イモチ送り	
Ⅴ 神社（久々美雄彦神社）	1 祭礼行事等		
	2 広報調査		
	3 財政	1 帳簿	
		2 境内地入札	
		3 金銭物品管理	
4 境内建築管理			
4 その他		社司、氏子惣代	
Ⅵ 書籍・写本			
Ⅶ 絵図			Ⅰ～Ⅵに分類できないもののみ
Ⅷ その他			断簡、番外など
欠番			

一例である。

また、「濃州多芸郡石畑竜泉寺上方桜井橋爪五ヶ村与同国石津郡沢田村井水論之事（向後下六ヶ村より沢田村へ毎年井料米1石宛出すこと、写）」（中出雲、戸日向他、宝永2年〈1705〉4月6日、分類番号I 6-1-1、整理番号8-244）や、〔宝永2年濃州多芸郡石畑村外四ヶ村と石津郡沢田村井水論裁許裏書絵図〕（伊伊勢[㊤]、水伯耆[㊤]他、正徳5年〈1715〉11月25日、分類番号I 6-1-8、整理番号1-6）などは、水論当事者である村落に伝えられた幕府評定所の裁許絵図裏書類として貴重なものである⁷⁾。高木家の関与が直接記されているわけではないが、その治水役儀の背景事情を示す史料と捉え得る。そのような視角に立って、上記①②③に分類した史料は、必ずしも高木家の具体的な関与がない部分も含めて、高木家文書と一体的に把握するために、日比家文書としての内容分類記号番号とは別に、いわば「広い意味での高木家文書」としての文書番号を付与してみたい。すなわち、①②は「E 治水-3 普請見廻-1 普請見廻」、③は「E 治水-2 用水論所見分-1 用水論所見分」に該当する文書として、それぞれ「エココレクションデータベース」の中の「高木家文書デジタルライブラリー」に追加搭載し、「カテゴリー検索」をできるようにするのである。高木家文書よりも局所的ではあるが、より深く流域の実情に踏み込んだ歴史情報資源として活用されることを期待したい。

なお、日比家文書および次にみる小寺家文書のうち、高木家文書の分類を適用できない固有の内容を含む全体像は、先述のとおり、「エココレクションデータベース」の中に、「高木家文書デジタルライブラリー」と並ぶチャンネルとして「流域伝来の歴史情報資源」を設け、その中に目録情報と写真画像を掲載する予定である。

3、小寺家文書について

小寺家文書（小寺登氏所蔵）は、高木家（西家）の家臣方に伝来した8378点（2010年3月17日現在の集計点数）にのぼる古文書群である。個人所蔵の古文書群であるが、関係各位の理解を得て、将来的には、附属図書館の「エココレクションデータベース」に、文書1点ごとのメタ・データと、主要文書の画像情報を公開すべく、作業を

進めているところである。

旧高木家陣屋の周辺に現在も居住している小寺姓の家々の先祖および同族関係については、未確認の部分も多いが、小寺登家については、安永5年（1776）に「代々」を納めるための墓石を建立している権助吉雄が、現在さかのぼり得る事実上の初代と思われる。その墓石は、現在も同家の墓地に現存している。世代的に、権助吉雄の子とみられる助左衛門知雄は、初め源次兵衛と名乗り、明和5年（1768）12月に、御用人として高木家に起請文を提出している。そののち、何らかの事情で退身したとみられるが、安永9年（1780）から再度、高木家に出仕している。その間、明和7年（1770）に牧太雄乗、翌年に平八郎紹雄の兄弟を儲けている。助左衛門知雄が享和元年（1801）に死去すると、その翌年12月付で、牧太雄乗は「亡君様」すなわち父の指示に従い、弟の平八郎（当時富五郎）紹雄に「田畑分地覚帳」を与えている（整理番号25-95）。この平八郎紹雄にはじまる分家が、現在の小寺登家（以下、小寺家と略称する）につながってゆく⁸⁾。

小寺家伝来の古文書は、文明9年（1477）11月付の「浄土真宗の報恩講に関する書付写」が突出して古いが、おそらく近世期の写しである。ついで、寛文5年（1665）出版の「小学卷之六」など、近世初期以降の刊本・写本類が続くが、いずれも、享和2年（1802）以後に同家に流入し、蓄積されたものであろう。文書のおおよその時期区分は、いまだ確認中であるが、近世文書約900点、近代文書約7000点、その他未確定である。内容分類についても、作業中の段階であるが、表2のように設定している。内容分類を施す以前の、文書調査時点の伝来状況（現状記録）については、日比家文書と同様、調査着手段階の文書箱など既存のまとまりごとに整理番号を与えることで対応している。分類番号と、整理番号の双方を組み合わせ活用することを想定している。

表1の日比家文書の内容分類と比較して気づくことは、第一に、近世の小寺家にとっての役儀は、村運営への関与ではなく、高木家への出仕であり、そうした実態が、文書の構成にも如実にあらわれていること、第二に、近代以後についても、行政への関与は公的生活の一部に止まっており、少なくとも量的に主要部分となっているのは、警察勤

表2、小寺家文書内容分類案

大項目		小項目	備 考
高木 A 領地	2 戸口	1 人別改 9 その他	1 点 (暫定点数、以下同) 1 点
高木 B 支配	2 諸役 4 法令 10 林野	3 助郷 5 その他 3 その他 1 山林 2 扶持 3 土帳	9 点 91 点 1 点 86 点 9 点 6 点
高木 C 家臣	1 分限 2 勤仕 3 家 4 その他	1 取立・出仕 2 誓詞 3 勤向 4 退身 1 相続 2 縁組 3 屋敷 1 その他	13 点 1 点 4 点 9 点 3 点 6 点 2 点 24 点
高木 D 勤役	2 参勤 3 軍事	1 参府 2 軍備 3 武術	3 点 1 点 1 点
高木 E 治水	4 その他	1 その他	2 点
高木 F 家政	2 家督 4 書状 5 交際 7 家作 10 吉事	1 当家 2 老中奉書 3 側用人奉書 4 若年寄奉書 5 尾張藩用人奉書 2 その他 1 多良屋敷 1 婚姻	1 点 3 点 1 点 1 点 4 点 1 点 3 点 2 点
高木 G 財政	1 収支 2 村請支出 3 借財	2 蔵米収支 1 村請支出 3 その他	1 点 1 点 1 点
高木 H 明治	1 国事	1 新政出仕	22 点
高木 I 書状・書付	1 近世	2 高木家 3 他家 4 寺社・公家 5 百姓・町人 6 その他	4 点 32 点 2 点 4 点 1 点
I 近世	1 家業経営 2 書状 3 家族	土地取引 帳簿 領収書類 融通・講 金銭物品等書付 加納文右衛門 その他 吉凶伝事 刊本・写本 諸芸 租税 行政 選挙 寄付貢獻 儀礼祭典 名刺 耕地整理組合 産業組合 教育会 衛生会 青年会 同窓会 信用販売購買組合 日本赤十字社 講 その他 土地山林 家屋土蔵 養蚕 貯蓄投資保険 日記 帳簿 人数金銭物品等書付 領収書類 公務 会計・給与・経費 警官生活 書籍・雑誌・広報類 その他 教育 手習い 衛生医療 広告 刊行物 絵葉書・古写真類	
II 近代	1 公的生活 2 団体組合会合 3 家業経営 4 警察勤務 5 家族		購買勧誘全般 印刷物全般

Ⅱ 近代	5 家族	吉凶仏事	
		寺社信仰	
		その他	
	6 書信	加納文吉	
		加納基喜	
		桑原まさ	
		小寺勇造	
		小寺才	
		小寺栄	
		小寺信	
		小寺林平	
		小寺牧太	
		小寺弓之助	
		小寺絃之助	
		坂倉てる	
		坂倉弥作	
		杉本忠兵衛	
		須藤重松	
		高木貞正	
		高木貞元	
		立木とよ	
		立木ゆり	
		西脇正治	
		西脇貫逸	
		西脇武八郎	
		西脇佳美	
		藤井つう	
		三輪捨蔵	
		三輪為司	
		安居喜八	
		山口彦蔵	
		その他	
	7 諸芸	文芸	
		墨跡	
		絵画	
		能・狂言・謡	
		その他	
	8 包紙・封筒・帯封類		分類可能な内容物との連動確認困難なもの

務関係の史料であること、第三に、近世・近代の家業経営に関する部分は、土地取引、帳簿、金銭物品等書付など、共通性の高い部分もある一方、近世・近代とも、他の分類には吸収しにくい家族間の書状・書信の保存率が高いこと、以上である。総じていえば、日比家文書は「村の文書」としての色彩が強いのに対し、小寺家文書は高木家および警察に出仕勤務した当主を中心とした「家の文書」という色彩が強いように思われる。

上述のとおり、小寺家文書のうち近世部分の内容構成は、高木家へ家臣として出仕していた事実が大きく影響している。表2の内容分類も、高木家の「家中」であった同家が、どのような文書を主家と分有していたのか、一見して明らかとなるように、作成を進めている。具体的には、高木家文書の分類を適用できる小寺家文書は、「広い意味での高木家文書」として、積極的に高木家文書の分類番号を与え、密接に関連する文書群であることを明示している。こうした作業を行ってみると、高木家と小寺家の主従による文書分有については、大局的にみて、つぎの2類型が存在したものと判断できる。

第一は、現用由来の分有というべき類型である。表2で、高木家文書の分類番号を適用した部分について、該当文書の暫定点数を表示したが、「高木B支配-2諸役-5その他」と「高木B支配-10林野-1山林」に分類できる二群の文書は突出して多い。小寺家が高木家臣としての任務遂行に関わり、当初は現用文書として保持していたと想定できる史料群である。このうち前者の多くは、おそらく、小寺家に給与される扶持等から、村方庄屋が必要経費等を差し引いている勘定書類で占められている。在地旗本家臣の存在形態を示す興味深い史料群といえる。後者は、高木家臣としての小寺家の主な任務が山奉行であったことに関連して蓄積された文書群と見なし得る。さらに、「高木C家臣」のうち「1分限-3士帳」を除く部分と、「高木H明治-1国事-1新政出仕」もまた、主として、高木家に出仕していたことに関わって授受された文書群である。維新时期における旗本家臣団の解体過程について、家臣団の立場を示す貴重な史料を含む。このほか、「高木D勤役-3軍事-2軍備」の1点は、小寺家が高木家の軍備西洋化に従事していたことに関わる史料であ

り、「高木F家政-7家作-1多良屋敷」は、小寺家当主が作事奉行として、天保期に焼失した高木家屋敷の再建に関与したことを示す史料を含み、「高木F家政-10吉事-1婚姻」の1点は、小寺家当主が高木家の婚姻の連絡役にあたっていたことを示す史料である。いずれも、小寺家当主が山奉行など本務の傍らで、おそらく臨時的にこなしていた役儀に関わる史料群であろう⁹⁾。

第二は、散逸由来の分有というべき類型である。たとえば、先にみた「高木C家臣」分類のうち、除外した「1分限-3士帳」の6点は、高木家家臣団の名簿の断片で、小寺家の高木家への出仕ないし役儀と直接関連するとは考えにくい。また、その正本に該当し得るものが、おおむね高木家文書として伝来している¹⁰⁾。この6点の断片的な士帳は、おそらく高木家において不要と判断され、廃棄され散逸した結果、良質な料紙として、小寺家の所蔵に帰したものではないか。

ちなみに、士帳で判明する小寺家歴代の役儀とは、おおむね次のようなものである（4ケタ数字は着任時の西暦）。

①小寺助左衛門・知雄（上述）

1784 川通御用、1785 御領知方、1785 御祐筆向、1792 御隠居様表向御奉札、1793 奥向懸

②小寺牧太・雄乗（①知雄の子、上述）

1792 大目付加役、1794 川通御用懸、1800 諸御払方加役、1800 御米蔵立会、1800 御領分方、1814 江戸状連名

③小寺織衛・鼎雄（②雄乗の子、のち出奔）

1811 御祐筆方加役

④小寺勇・速雄（②雄乗の子）

1818 御下屋鋪御番、1822 御側向勤仕、1822 御子様方御附添、1824 御納戸方、1825 御蔵奉行、1825 御山奉行、1826 御作事奉行、1828 御髪掛御子様共、1828 御目付仕埋、1835 御領分掛見習、1843 表御奉札連名、1848 御領分掛本役、1848 川通役見習

⑤小寺平八郎・紹雄（①知雄の子、②雄乗の弟、上述）

1821 御山奉行、1823 御勝手吟味役同御目付・御普請方元メ同奉行、1825 御作事奉行

⑥小寺庄兵衛・忠雄（⑤紹雄の子、のち出奔）

1823 御側向仕埋、1823 御子様方御附添、1825 御髪掛御子様方御髪共、1825 御子様方

御稽古懸、1825 御子様方御附、1825 御台所方元メ、1826 御蔵奉行、1828 御馬役見習

⑦小寺林平・重雄（⑤知雄の子）

1850 御山奉行

すでに述べたとおり、①知雄の子が、②雄乗、⑤紹雄の兄弟で、それぞれ長子出奔などの危機を乗り越え、本家、分家として存続している。現在の小寺家の直接の先祖は、⑤⑦の系統で、山奉行を主な役儀としている。こうした小寺家歴代の役儀内容をふまえると、「高木F家政-4書状」のうちに分類できる江戸幕府の老中奉書、側用人奉書、若年寄奉書、および尾張藩用人奉書や、「高木I書状・書付-1近世」のうちに分類できる幕藩領主との交際関係史料の多くは、小寺家の高木家に対する役儀との関連性は薄い。襖など建具の裏貼に転用された形跡が明確なものも含まれており、これらの文書群もまた、高木家においていったん廃棄され散逸したのち、高木家の身辺にあった小寺家の所蔵に帰したものとするのが自然であろう。

もちろん、当時の高木家において、不要と判断され廃棄された文書であったとしても、今日の視点から見ると、重要な意味を持つ文書である場合は珍しくない。たとえば、「高木I書状・書付-1近世-3他家」のうちに分類している〔鹿王院因侍者殊の外盛人、兄弟中相心得るべく書状〕（酒自楽（花押）→高木権右衛門殿、5月8日、整理番号25-134）は、寛文11年（1671）5月以前に、西高木家4代貞則の実父である幕府旗本酒井忠知から、養父高木貞勝に出された書状である。明らかに建具の裏貼などに廃棄転用された跡が残っているが、近世初期の史料が意外に少ない高木家文書では知ることのできない、初期高木家の動向を示している。高木家における文書廃棄を伴う文書管理、すなわちアーカイブズの実態に迫り得る手がかりとしても貴重である¹¹⁾。

以上、高木家文書と小寺家文書の連動を大局的に把握するための一つの試みとして、現用由来の分有と散逸由来の分有という区分を示してみた。前者の現用由来の分有は、主として、近世期における小寺家が、高木家の一員として、高木家文書をいわば現用文書の段階から分有蓄積していたと想定し得る文書群である。ここから敷衍して、高木家文書の分類番号を与えた日比家文書について

も、流域レベルで行われていた、治水文書の現用由来の分有と捉えてみたい。すなわち、高木家文書とは、小寺家文書など家中の文書と連動するだけでなく、本来的に、木曾三川流域ないし濃尾地域にも分有されてきた一大古文書群であり、外縁部はそもそも不明確な存在と捉えてみたいのである。このことはもちろん、流域地域の古文書群を、すべて高木家文書に従属させて理解しようということではないが、10万点規模の高木家文書は、流域地域の古文書群の全体構造を把握しようとする時に、大きな手がかりとなることも確かであろう。流域地域の古文書群の全体構造の中に、高木家文書を位置づけられないかということでもある。なお、小寺家文書の中にも、「E治水-4その他」に分類できる史料があり、さきに列举した小寺氏一族のうち、おそらく川通役を勤めている本家筋の②小寺牧太・雄乗の作成文書だが、このほかには、高木家の治水役儀に関連する文書は見出せない。小寺家文書は、基本的に木曾三川の治水との連動性は薄い文書群だが、治水文書として注目されがちな高木家文書の別の側面を浮かび上がらせる手がかりとして貴重な存在といえよう。

後者の散逸由来の分有は、必ずしも現用段階から意図的に保存管理されていたものではなく、高木家において膨大に廃棄され散逸したであろう高木家文書の一部分を分有していたものと捉え得る。いいかえれば、ここに含まれる文書群は、必ずしも小寺家ではなくても蓄積し得た文書群であったと想定できる。ただし小寺家文書については、武家領主としての高木家の機能停止に伴う近代以後の散逸由来の分有ではなく、高木家が領主として機能していた近世段階の散逸由来の分有を含んでおり、高木家のアーカイブズに迫る手がかりを含んでいる可能性に留意する必要がある。

課題は多々ある。たとえば、「高木Ⅰ書状・書付-1近世」に分類した史料の中には、上述した酒井忠知書状のように、小寺家が文書の現用段階では明らかに関与しなかったものと、宛名に小寺家当主を含むなど同家が現用段階から関与したであろうものが混在しており、必ずしも、文書の内容分類と一致していない。また、小寺家当主宛であるなど、文書の現用段階から同家が関与している文書の伝来についても、必ずしも高木家および小寺家主従の意図的な管理が及んでいたとは限ら

ず、廃棄・散逸という過程を経ている可能性はある。また、上述の通り、等しく散逸由来の分有と括った中にも、近世段階の意図的廃棄と、近代以後の意図せざる流出という、質的に異なる部分が存在したとみられる。しかしいずれにせよ、高木家と小寺家という、近世武家の主従双方に、これほどまとまった形で古文書が伝来している事例はおそらく稀であり、その連動を問うてみる学術的な価値は高いと考える。本稿の試みとは異なった、より斬新な視角に立った検討考察の出現を期待したい。

4、関連文書調査の課題

すでに述べたとおり、附属図書館研究開発室は、高木家文書の整理事業を継続する一方、その高度活用の実現にも力を注いでいる。高度活用を行おうとする場合、重要となるのは、日比家文書や小寺家文書のような、関連文書の調査である。しかしながら、関連文書の調査とは、具体的にどのような重要性を帯びているのであろうか。再度確認しておく必要があるだろう。

実は、高木家文書の整理事業の着手段階から、関連文書の調査は、大きな柱となっている。『高木家文書目録』巻5の解題は、未完に終わった整理事業の今後の課題を列举し、その末尾に「関連文書の収集」という項目を立て、その重要性を具体的に指摘している（p29）。ごく端的に記述されているが、さらに要約してみると、つぎのようになる。

- ①高木家は西・東・北の三家からなり、附属図書館が所蔵しているのは西家の文書だが、高木家の全体像を知るには、東家、北家の文書調査を行う必要がある。
- ②高木家の領主としての性格を知るには、所領として支配される側にあった多良地域の地方文書の調査収集を行う必要がある。
- ③治水関係文書は、高木家文書のための研究では不十分であり、高木家とともに治水に関与していた笠松代官所伝来の文書をはじめ、木曾三川流域に伝わる文書を収集し、総合的に研究する必要がある。

高木家文書調査室の設置以来、報告書や図録などで、その存在がすでに公表されている関連文書の情報を一覧にしてみると、表3のようになる¹²⁾。

表3、高木家文書関連文書一覧

No.	所蔵者	点 数	三 家	典 拠	備 考
1	市田氏（揖斐川町、岐阜県歴史資料館寄託）	32		古川 No.10 p172	上石津町史史料編 1975 に掲載
2	伊東氏（多度町）	3		Ⅱ p8、Ⅲ p11	流域旧家
3	岩瀬文庫（西尾市）	6		Ⅶ p13	
4	大久保氏旧蔵（養老町）		北	地域貢献 18 p34	北高木家文書、村方文書を含む
5	大沢氏（岐阜市）	2		古川 No.9 p301	1949 年名大購入時の古紙業者
6	広栄寺	16	東	V p16	ほか寺文書あり
7	個人（大垣市）		北	2003 図録	北高木家臣
8	個人（大垣市）	95	西	地域貢献 17 p52	
9	個人	約 350		地域貢献 18 p35	高木家領隣接の牧田村関係など
10	小寺氏（大垣市）	8450		2009 図録	西高木家臣
11	正林寺	3		Ⅳ p10	高木家菩提寺
12	鈴木利通氏	1	北	V p20	北高木家臣
13	高木貞勝氏	109	西	Ⅳ p11、古川 No.9 p300、No.10 p183	高木家文書旧蔵者
14	高木貞勝氏	49	西	古川 No.11 p155	高木家文書旧蔵者
15	高木邸襖裏貼（大垣市）	約 1500	西	地域貢献 19 p34	
16	多聞櫓文書（国立公文書館内閣文庫）	92		古川 No.11 p158	
17	立木氏（東京都）	112	北	地域貢献 17 p52	北高木家臣
18	筒井氏（刈谷市）	343	西東北	古川 No.9 p300	大阪市古書店等経由
19	筒井氏（刈谷市）	1		古川 No.10 p172	東家宛、多良郷小山瀬村文書か、94 年購入
20	筒井氏（刈谷市）	122	東	古川 No.12 p215、230	
21	徳川林政史研究所	164	東	Ⅵ p13	164 点ほか書状多数、仮目録あり（所蔵機関 HP）
22	名古屋市蓬左文庫	2165	東	Ⅱ p9、Ⅲ p12、Ⅵ p13	林政史より移管
23	名古屋城振興協議会	2		古川 No.9 p301	
24	根岸氏（東京都）	2		古川 No.9 p300	文京区本郷古書店経由
25	日比氏（養老町）	5878		2006 図録	流域旧家
26	福長氏旧蔵（岐阜市）	約 2000	西	地域貢献 18p 35、19p 35	
27	水野氏旧蔵（名大文）	82		目録 5p 694 ～	
28	三輪巽氏	61		Ⅳ p11	上村村方文書および私文書
29	三輪豊氏		西	Ⅳ p11	多量、綿密な調査を要する
30	森川氏（海津市）		東	古川 No.12 p215、2004 図録	
31	森川氏（海津市）			地域貢献 18p 35	流域関係文書

注）所蔵者 50 音順。出典：Ⅰ～Ⅶ＝『高木家文書調査報告』Ⅰ～Ⅶ（名古屋大学附属図書館高木家文書調査室、1972～79 年）、古川 No.7～15（『名古屋大学古川総合研究資料館報告』7～15 号、1991～99 年）、地域貢献 17～19（『平成 17 年度～19 年度地域貢献特別支援事業報告書』名古屋大学社会連携課、2006～08 年）、2003 図録（『2003 年春季名古屋大学附属図書館特別展 川とともに生きてきたⅡ——新発見史料・北高木家文書にみる木曾三川流域の歴史・環境・技術——』）、2004 図録（『名古屋大学附属図書館 2004 年秋季特別展 川とともに生きてきたⅢ——東高木家文書にみる木曾三川流域の歴史・環境・技術——』）、2006 図録（『名古屋大学附属図書館 2006 年秋季特別展 江戸時代の村と地域——美濃養老・日比家文書にみる暮らしと災害——』）、2009 図録（『名古屋大学附属図書館 2009 年春季特別展 旗本高木家主従の近世と近代——高木家文書と小寺家文書——』）。

①の東家関連では、No. 6、18、20～22、30 の文書群の存在が確認されている。このうち、No. 6 広栄寺に伝来した旧東家文書は、同寺を当事者とする争論等に関わる史料群である。同寺は当事者として、つまり現用文書として、これらの文書を分有保持してきた可能性を持つ。一方、No. 18 以下 5 ヶ所に分散している旧東家文書は、おそらく 1930 年以降、東家より流出した文書の一部であり¹³⁾、散逸由来の分有の範疇に属すると思われる。このうち No. 30 は、高木家の治水見回り区域であった高須輪中の豪農方が、治水関係文書の散逸を防ぐべく、一括して受け入れたと考えられる文書群である。質量ともに注目すべきもので、治水関係係図を「エココレクションデータベース」

に搭載するなど、現在も重点的な調査・研究を継続している。また、No. 22 は、高木家文書調査室のメンバーが、文書の整理と目録化に直接関与し、名古屋大学所蔵分と同じ観点に立った内容分類目録を作成している¹⁴⁾。①の北家関連では、従来、高木家文書調査室のメンバーが 1975 年 11 月 30 日に訪問するわずか数ヶ月前に、文書の大半を処分されてしまったという No. 12 や、No. 18 の存在が知られていたが、附属図書館研究開発室が、文書の高度活用をめざして、関連文書の収集に力を入れた結果、No. 4、7、17 などの存在が確認された。とくに No. 7 については、2003 年展示会でその概容を公開する¹⁵⁾とともに、現在、文書目録の公表をめざして、こちらも重点的に作業を継

続している。

以上、東家と北家の文書収集の努力について略述したが、実は、西家の文書についても、大半は名古屋大学の所蔵（事実上の散逸的分有）に帰しているものの、旧蔵者方で保持された No. 13、14をはじめ、No. 8、15、18、26、29 など、各所に分有されている部分もある。さらに、No. 1 市田氏所蔵分は、高木家が三家に分かれる以前の織田・豊臣期の古文書を中心としており、江戸幕府伝来の No. 16 多聞櫓文書は、高木家が幕府に提出したとみられる文書を含んでいる。こうした各所に分有されている少数の文書が、名古屋大学で分有されている膨大な文書から導き出される推測を的確に裏付け、あるいは覆す可能性を、常に念頭に置かなければならない。その点で、こうした文書の存在を、少数断片的なものとして、軽視することは許されない。また、高木家の存続を内面的、宗教的に支えた存在として、菩提寺等の文書調査も課題である。このうち、No. 11 正林寺については、不幸にも、2009 年 3 月に火災にあい、調査の対象となった 3 点をはじめとした所蔵文書の安否が気遣われる。古文書の消滅は着実に、ときに劇的に進行する。自然淘汰を待つて希少化したものだけを調査対象とするわけにはいかない。膨大に存在する史料の価値を着実に確認し、保全措置を施すことが急務となっている。

②の所領関係文書の収集は遅れている。従来は、No. 19、28 の存在が報告されていた程度である。支配者側の文書である高木家文書の膨大さに比して、被支配者側の文書である多良地域の地方文書の残存は乏少であるとも考えられてきた。ただし、地元の方々を中心とした地道な調査の結果、No. 4、9 など、現地の旧家や寺社伝来の古文書というものが、全く存在しないわけではないことが、徐々に明らかとなりつつある。No. 10 小寺家文書の存在も、そのような中から浮上してきた情報の一つである。領主高木家とその支配をうける地域社会は、一体どのような関係を取り結んでいたのか、たとえば、武士身分と百姓身分の間点にいた家臣団は、領主高木家と村社会の狭間で、どのような存在形態を示していたのか。こうした問題の解明は、美濃の山奥の高木家所領という、限られた地域社会内の事柄ではなく、近世社会全体の本質理解につながるであろう。

③の治水関係文書については、高木家文書の特質として、すでに高い評価を得ている部分である。附属図書館研究開発室においても、「エココレクションデータベース」の内部に、「木曽三川流域環境史」のチャンネルを設け、GIS 地理情報システム、古絵図コレクションなどの画像情報や、流域に残されている治水碑の内容を示す「碑めぐり」^{いしぶみ}、「美濃国地誌」から読み取ることのできる地理情報など、多様な歴史情報資源を総合的に活用できるデータベースの研究開発を進めている。本稿の主題である古文書は、こうした多様な歴史情報資源の、有力ではあるが絶対的なものではなく、その一部であるという視角は、今後とも大切にする必要があるだろう。

その一方で、流域住民の視点を示す古文書の存在については、意外に調査が進んでいない状況であったことも確認しておきたい。流域住民の視点を示す古文書として、従来その存在が指摘されていたのは、No. 2 伊東氏所蔵の 3 点であったと思われる。この 3 点の古文書は、「高木様へ致拝借候」という付紙があるという。厳密に言えば、高木家文書の一部として、その存在が確認されたものである。しかし、近世期に流域で庄屋をつとめていた伊東家が、その役目の必要上、高木家から借用した文書だとすれば、高木家文書の近代以後における散逸由来の分有とは質的に異なり、流域住民の治水に対する関心のあり方を示す現用由来の分有の事例として注目できよう。そののち、しばらく、流域住民の視点を示す古文書は、少なくとも名古屋大学所蔵高木家文書との関連では行われなかったが、この部分に本格的に切り込んだのが、本稿で主題の一つとした No. 25 日比家文書の調査、研究である。すでに述べたとおり、流域住民の視点から、高木家あるいは幕府の治水の意義を捉え直す手がかりとして、今後のさらなる活用が期待される貴重な文書群である。

ところで、日比家文書のような古文書群は、必ずしも、流域において極めて例外的に伝来した地方文書というわけではなく、類似の古文書群が存在し、相互に密接に連動している¹⁶⁾。日比家文書のような文書群の調査に着手した以上、流域に伝来する他の膨大な地方文書の調査も、視野に入れる必要が出てきたといえるのである。

もちろん、名古屋大学のような一つの学術機関

で、調査に費やすことのできる資力には限りがある。また、所蔵者や関連する公的機関が、すでに適切な文書調査を実施している場合もある。木曾三川流域および濃尾地域伝来の膨大な古文書群の調査を、延々と続けるわけにはいかないことも確かである。しかしながら、高木家文書の高度活用のための関連文書の調査は、決して手当たり次第の調査対象の拡大ではなかったことを確認しておきたい。すなわち、これまで重視されてきた、もとは高木家の旧蔵であった散逸由来の分有文書群というよりは、高木家の活動と関連しつつ流域ないし地域全体で本来的に分有されてきた現用由来の文書群というものが視野に入ってきたことは、大きな成果と言ってよいのではなかろうか。

つまるところ、高木家文書とは、名古屋大学所蔵分の残り何点かを整理することで全体がみえるという存在ではなく、流域および地域社会の現用由来の文書分有秩序（アーカイブズ）の中に位置づける必要のある存在である。表3 No. 4、8、9、31 など、すでに縁のできている文書群をはじめとして、附属図書館が未整理のままで所蔵している尾張藩新田庄屋岡田家文書、美濃日置江文書、その他新規所蔵文書など、地域伝来の文書群を着実に整理、調査、研究し、最終的に「エココレクションデータベース」に搭載し、高木家文書の「新たな全体像」を目に見える形で提示することが、従来の整理事業とは異質な、明確かつ新たな目標になると考える。

さらにいえば、文書群の構造分析を通じた基本目録の作成を通じ、文書群が生成し機能した「組織」や「場」の問題に切り込み、現在や未来における文書活用の問題まで視野に入れようとしている近年のアーカイブズ学（記録史料学）の理論に学ぶことも、今後の重要な作業となる。高木家という「組織」と、木曾三川流域という「場」は、文書の生成、蓄積、活用において、相互にどのように連動していたのか、本稿のような文書整理の現場体験に基づく素朴な認識レベルから飛躍し、アーカイブズ学において構築されている理論の中に位置づけ、あるいは既存の理論に修正を迫り、

その普遍的な価値を確認し、広く情報発信してゆくことを、今後の大きな目標として掲げておきたい。

参考・引用文献

- 1) 伊藤孝幸①「名古屋大学による高木家文書購入の顛末」（名古屋大学附属図書館報『館燈』108、1992年）、②「名古屋大学による高木家文書購入の一件について——文学部創設後の諸相を交えての聞き取り調査報告——」（『名古屋大学古川総合研究資料館報告』10、1994年）など。
- 2) 秋山晶則「高木家文書調査報告（補遺の7）」（『名古屋大学古川総合研究資料館報告』13、1997年）
- 3) 以上、それぞれ展示会図録が発行されている。
- 4) <http://libst1.nul.nagoya-u.ac.jp/eco/index.html> で公開している。
- 5) 以上、それぞれ展示会図録が発行されている。
- 6) 『江戸時代の村と地域——美濃養老・日比家文書にみる暮らしと災害——』（名古屋大学附属図書館2006年秋季展図録、2006年）p54 参照。
- 7) 同上、史料番号17、18。
- 8) 以上、『旗本高木家主従の近世と近代——高木家文書と小寺家文書——』（名古屋大学附属図書館2009年春季展図録、2009年）を参照。
- 9) 以上、主な内容は同上参照。
- 10) 「高木家文書C1-3-1～C1-3-36」。
- 11) 斎藤夏来「真宗門徒旗本高木家の禅宗信仰——2009年春季特別展「旗本高木家主従の近世と近代」余録——」（『名古屋大学附属図書館研究開発室LIBST』No. 16、2009年）を参照。
- 12) その他、未調査史料や海外流出史料の情報も寄せられているが、十分に整理できていない。今後の課題としたい。
- 13) 『川とともに生きてきたⅢ——東高木家文書にみる木曾三川流域の歴史・環境・技術——』（名古屋大学附属図書館2004年秋季特別展図録、2004年）p4 参照。
- 14) 『名古屋市蓬左文庫古文書古絵図目録』（名古屋市教育委員会、1976年）。
- 15) 『川とともに生きてきたⅡ——新発見史料・北高木家文書にみる木曾三川流域の歴史・環境・技術——』（2003年春季名古屋大学附属図書館特別展図録）。
- 16) 『平成20年度 地域貢献特別支援事業報告書』（名古屋大学社会連携課、2009年）p34 を参照。

附記 本稿校正中の2010年3月23日、日比家文書の寄贈者である日比達男氏が逝去されました。謹んでご冥福をお祈り致します。